土佐の歴史の発端を開いた

物部文化の話

松村義正

明治十七年九月三十日の高知県布達に「久枝村、下島村、物部村の三村戸長役場久枝村」とあつて、この中〃ものべ村(上岡山を含む)の名は〃むかしからの名邑地である。このごろ郷土史研究に民族文化ということが高く評価されている。祖先から今日までもち続けて来た日本民族のもつ特異な文化を尊重せねばならないことはもちろんで、そのため各地方史研究会があり種々の角度から日本史的な流れにそつて土佐の姿を見詰めようとする大きな動きを見せている。南国市は、土佐の歴史の発端を拓いた物部文化、国府文化、闘豊文化と三ツの主要文化の流れをひろく包括している。郷土史研究の上に無尽蔵の宝庫だといえよう。

※物部、国府、闘豊の三文化のうち、最初土佐の文化をひらいたのは、饒速日命(ニギハヤヒノミコト)の子、可美真手命(ウマシマテノミコト)を祖とする物部民族文化であつた。既ちものべ民族によつて名付けられた物部川の下流上岡山は、この部民の最初の土着地で、市の物部近傍にこの民族が繁栄し土着安住したもの。上岡山には〃天の磐船〃の神話めいた伝説がある。わが国は遠い太古から国の動でき、国民生活の源泉とし独特の神話は国家の起源に関する伝承であると共に古今を通じ常に現実に生きている。しかし太古のむかしの原住民がどんな処に足跡を印しその文化の発達はどこの辺から発して来たのか、文字が無い当時のことは人類の物質的遺物によつて、その過去を研究する考古学の研究とその成果に待つより外はない。

※かの龍河洞の石壁に捲き込んでいる弥生式土器の、鐘乳石灰凝結の年代から考え三千のむかし穴居民族が住居し、原始的生活を続けていた確証は動かすことができないものがある。しかしこれらの住民よりもずつとすぐれた人種で今日の土佐人の祖先というべきものに、その頃の前後物部川の下流沿岸ものべ近傍に始めて土着し文化の種をまきひろめた〃もののべ〃氏の一族がある。この物部氏について郷土史の寺石先生は、「日本の大族といわれた物部氏の遠祖饒速日命が〃天の磐船〃に乗つて土佐の中央に天降つて、初めて国土を開らき、その民族が繁昌して〃もののべ〃の郷土を生み、中央を流れる大河を物部川と呼び、居民はここに土佐文化の発端を拓いたもので、むかしのもののべ氏の祖神が石船に乗つて天降つたという神話は、海路で部民を連れてここに土着安住したということであろう。その土着の初めは上岡山のあたりで、そののち、大忍郷東川村(今は三ツに分村して東は芸西村、中は夜須町、西は香我美町東川)の石船神社が鎮座する辺に居住されたものであろう」と、いわれている。

※そこで土佐の歴史を語るならば、まず土佐を開いた祖神とつながりをもつ物部文化から出発すべきであつて、神武天皇は大いに論功行賞をなし、饒速日命の子、可美真手命を近衛の将として殿内を衛らしめたことは国史に明らかなところで、後世〃もののべ〃というと、軍隊のことにも通じ所謂武士を〃もののふ〃というのも〃もののべ〃の語から転じたものといわれている。要するに土佐の文化は、今の南国市である日章地区物部の里にゆかりある物部民族文化から発端しているとを知るべきであろう。

映画

人間の条件を観て

十市・梨夫

多くの批評のように前・中編で梶の存在は多分に英雄主義的であつたが、終編ではずつと身近かなものとなり、梶の苦悩は当時満州で終戦を迎えた我々の苦悩そのものとなつてちかに迫つてくる。だが主人公のうけた肉体的苦痛と精神的苦悩は絶対避けがたいものであつたろうか？

あれだけの道を歩きつゞけることが出来るか。幾山河をのり越えて、ひたすらに美千子のもとへと急いできた。だが道はまだ涯しなく遠い。宵闇に物々と舞い狂う雪の中で飢餓と疲労のために梶の知覚は時々錯乱を起こす。遠くの山の麓に行き暮れた旅人を誘い寄せるような暖い灯がともりはじめた時、梶にはそこがかつての思い出の老虎嶺に思えたのである。

美千子よ俺はとうとう帰つてきた。七百余日の空白のはてに、あの日そこから出て今夜そこに帰る。梶は自分の苦行が涙ぐましく、ほほえましかつた。美千子よ喜こんでくれ、自分はこのようにして愛するお前のもとに帰つてきたのだと…。だが、現実には梶は彼をひたすらに待ちわびている美千子のもとえは帰ることがなかつた。

雪は降りしきり、遠い灯までさえぎる障害もない暗い広野を静かに忍び足で時間が去つて行つた。雪は無心に舞いつづけ、やがて、小さな丘を形作つていた。それが力つきた梶の最後の姿であつた。だが美千子は待つている。死んだということの確証を得るまではたとえ幾年月が去ろうとも、あの人はいつかはひよつこり私の胸に帰つてくるのではないだろうかと、いつまでも待つているのである。

後篇を見た後でどうにもやりきれない気持が残るのはそのせいなのであろう。終戦後十余年を経たいままも戦死者の妻や、かつて愛した人達はあの人はまだどこかで生きているのではあるまいかと寄蹟を頼む気持がまるでないとは云えないだろう。それが愚かな人間の弱さであるとしても……。

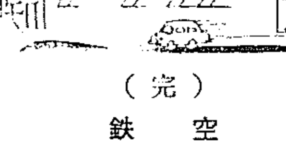
終戦の時南満にいた私は、遥々と満州を突き切つてシベリヤへ送られたが、四年後には無事に帰つてきた。梶は北満から南下しようとして失敗した。私は南満の高射砲部隊であつたから直接血を流すことはなかつたが、梶達は国境で夥しい血を流したのである。人間も一度血を流すと狂暴な動物の本能が蘇つてくるものらしい。そして武器に頼らざるを得なくなる。そこから梶の苦難の日々がはじまつたのだ。

更に梶達の行動について正当な判断を誤らしめたのは元の軍隊教育であつた。もし捕虜になればシベリヤで苦役に使われて一生祖国の土は踏めないであろうとの見方がそれである。だがとにかく行つてみろ、そうなつたらまたそうなつた時の思案だと、それに対して私達は案外冷静であつた。

自動小銃に抵抗してすぐに命を落す気にもなれなかつた。また一方では南鮮は米軍の占領下にあつて通れないのでウラジオから無事に送還されるとの噂もあつた。それはソ連の巧妙な宣伝であつたと後になつて分つたが、とにかく三、四年後には必ず帰れるとの確証があつたなら誰もあのような暴挙にはでなつたはずである。

ソ連の収容所の生活も最初軍隊組織の延長の時は苦しかつたが、軍隊組織が解体してからはむしろ安易な日々がつづいたことを経験者として附記しておく、

淡路島の道の悪いのには驚ろくほどで、高知県がはるかにましてである。その上山がせまく、行きちがいに二十台ぐらい並んで困つたこともあつた。四国への渡し場まできてみると、自動車の列がなかなか長い。聞くとフェリーボートが一隻ドック入りしているとのことで、私から大分前の者も今日中には渡れず、明日だと言われたときには、ガツガツした。他の者が急いだわけだ。小さな町を歩いて、映画でもと入口まで行つたが、あまりよくないのでやめた。雨もしよぼ〳〵降りだしたので小説を買つてきて車の中で読む。夕方近くなつてスピーカーが私の名を呼んでいる。しめた、フェリボートに乗れるのだ。私はしんがりから二番目である。港を出るとあまり波が高くて船が百八十度回転して進みだした。理由は、ルノー



(完)

鉄空

のような軽い車を前にすれば波をかぶることが少ないとのこと。お蔭で私のルノーは頭から波をかぶり外に出ることもできなく、雨の中を走つているのと同じだ。波があまり高いので、この便を最後にあとは欠航となつた。

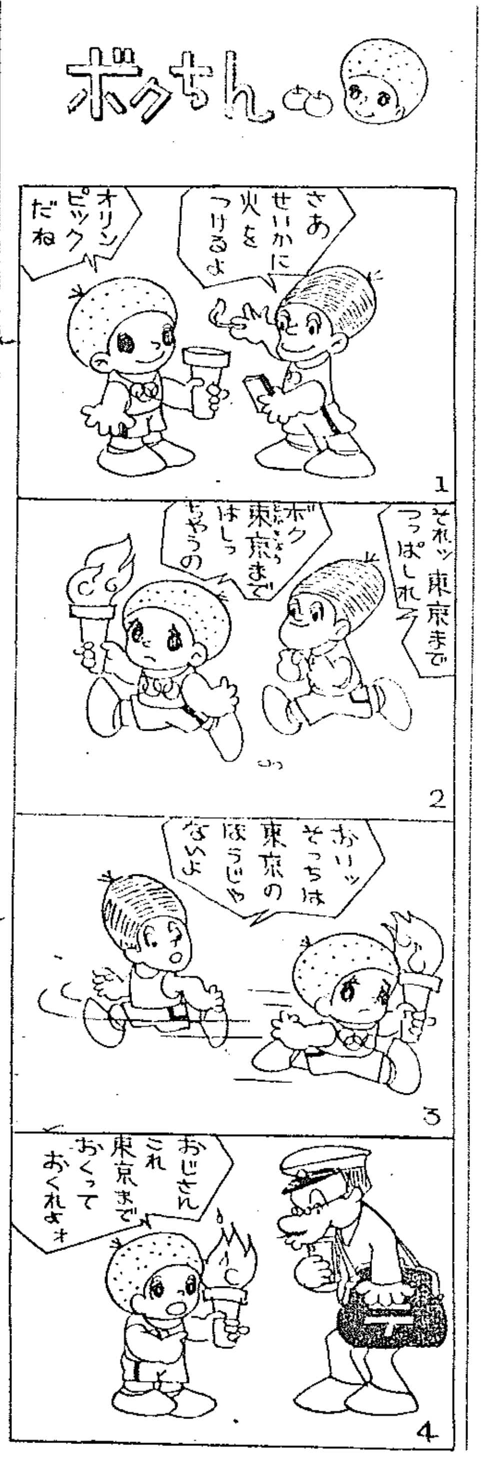
四国の鳴戸に着いたときはほつとした。いざ出発となつてエンヂンがからない。波をかぶつて電気がショートしている。他の車は私の車で波を防いでやつたので平気で走り出て行く。車の中のぼろぎれも波でびしよぬれなのでしようちなしだ。船員が見かねたか、ぼろ切れを出してきてくれた。半時間も苦労して、やつとエンヂンがかゝつた。出発しようとするとその船員が徳島市まで同乗さしてくれときた。どうも親切にしてくれると思つた。

鳴戸と徳島の道はすばらしく立派である。徳島から池田に向う道は非常に悪く、雨も降り出した。吉野川にそつてどん〳〵走る。外は暗くなつたので道を間く人も少ない。竹やぶが多くある。小さな町を通りぬけしばらく走る。

あつ!!右だ、あわててブレーキを踏んだが遅い、あやうくてんぷくするところであつた。大きな音と一緒に車ははね飛んで止まつた。これと同時にエンヂンがこわれるばかりふきだした。アクセルをゆるめても全然駄目だ、しまつた、スロツトルレバーが曲つたのだ。雨の暗夜に立おうじようとなつた。

近くに人家もない。野宿か車との中でぼんやりしていると、ほろ酔いきげんの六十才ぐらいの人が、どうしたかときくので、故障だというと、あんたは悪い場所でやつた、こゝはこの近くで一番悪い場所です。あそこが墓場で、あそこが火そうばだ、と指さす。しかし暗くて何にも見えない。そうこうしているうちに車が一台きた、私は手をあげて止め、その車のライトでエンヂンを照らして貰い雨の中で修理した。

ここで一時間近くまごついて池田に向つて出発した。池田に着いたのは十二時半頃であつた。一泊して翌朝出発し四国山脈もなんなく越えて正午頃家に帰りついた。東京から高知まで乗つて無事戻つて大いに意を強くした。ひまと金ができたら日本一周をやつてみたいと思う。



このごろのこと

稲生小四B　中橋加代子

わたしの家は丸山で、私は毎日田んぼの道をとおります。その道は、両がわに、みどりのこい田が遠くまでずらりとならんでいます。雨のふる日にとてもじるくその上草がたくさんあつてこまります。学校につくと足にどろをたくさんつけていることもあります、かえるが雨の日にかぎつてよけいます。大きいのや小さいかえるがはねまわつています。いねはとても太つてぐんぐんのびています。こえのきいた田んぼはきみどりの色をしています。田んぼによつてこいくや、うすいところがあります。わたしのうちは、のうりん四ごうと八ごうとそのほかいろいろなしゆるいのいねもたくさんつくつています。うちのとなりの田んぼではまだたがやしているところもあります。水がよけはいつていない田はもとのほうが黄色いのがふつうです。いまたがやしている田にはこのあいだまで麦やかんらを作つていたのです。風がふくとなみのようにゆらりゆらりとゆれています。どこのいねもよくみのるでしよう。私は同じ道を毎日通りながらいねの大きくなるようすがたのしみです。

思い出

たつた一つの夢が崩れ、足音すらも聞えない、涙がとめなく頬を伝つて流れた。スタンドに照し出された、この顔は、かつて私が鏡の中で合わしたことのない、美しい色をしていた。幼き日に姉と海辺に遊んだ時、見つけたあの貝殻の色に似ている。きれいだから海に返しましようね、と言つた言葉が思い出される。姉は海が好きだつた、いつも手を引かれて行つた頃の夏や冬の海が鮮明に浮んでくる。その姉も今はいない。

もう一度あの貝殻を見たい。鏡の中で笑おうとすればするだけ、歪んだくしやくしやの顔が写し出されるだけだつた。急に旅に出て見たくなり、一枚きりのお金で、できる限り遠くまで切符を買い、下駄ばきのまゝ夜汽車に乗つた。夕闇のベールの中に静かな吐息が灰色の空間にのつて聞え、まつ暗いガラスに写つた私によく似たまぼろしが、冷たく突つて見つめている。冴え冴えとした顔の中を思い出が浮んでは消えていつた。(南国市文学学校―N―)

春めいてくると気がのんびりするというか、なんとなく発行がおそくなつた。いつも月末から取りかゝる編集が、七日頃になつたからだろう。

▽他に事務があつてやる仕事であつてみれば、いくら熱意があつても充分とはいえない。来月号は早々にとりかゝり名誉?回復をはかりたい。

▽こんどの事件のこと知りたいと思つておられるだろうが、くわしく判明してからのことにし、中間的なことを書かないことにした。

▽お年玉クイズにとうとう正解者がなかつたのは残念だ。年に二～三回たのしんでもらうことにしたい。

▽広報や、市にのぞむことがあればどしどし申し入れ下さい。

謝類焼お見舞

去る四日類焼の節は早速お駆け付け下され消火、その他にご尽力たまわりその上御丁重なお見舞まで戴きまして御芳情の程有難く御礼申上げます。早速参上致しまして御挨拶申上ぐ可き筈でございますが、失礼ながら紙上にてお礼申上げます。

清水俊夫
三谷寿子
国友初恵
杉木重義
平山増水
田所光
松崎直起
九郎座光子
千谷久美子
石橋愛子
松木治猪
八井田須美子

謝近火お見舞

森田武一商店
関田菓子店
満喜屋蒲鉾店
山下衣料品店
門田ラジオ店
中山青果店
やまぐち商店
藤村商事
信和商会
武市文具店

水道工事
吉本鉄工所
TEL・日章29
日章・立田・町四
モータース
鉄工全般